

Title	雑誌の機能について : 逐次刊行物とその扱い 補論
Author(s)	諏訪, 敏幸
Citation	大図研論文集. 17 P.16-P.30
Issue Date	1994-08
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/2970
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

雑誌の機能について

(逐次刊行物とその扱い 補論)

A Functional analysis of journals and magazines

諏訪 敏 幸 (大阪大学)

抄 録

雑誌一般を対象に、①その機能的特質は何か、②それは何に根拠を持つか、③それによって雑誌はどんな文化的機能を持つか、について検討した。

先行する論著で雑誌の機能的特質として挙げられているものの中から、速報性、フロー性、経済性、記事の複数性と方向性、継続性をとりあげ、検討・整理した。また同じく文化的意義として雑誌記事の多様性を挙げる見解を検討した。

これらの検討結果をふまえて、雑誌の機能的特質は「情報を組織してその流通経路として機能すること」だと規定し、いわゆる速報性などの諸性質もここから派生することを示した。また、これによって、今日の大量かつ広いレベルにわたる情報流通が可能になったことに、雑誌の文化的意義を求めた。

以上の検討を通じ、雑誌を理解するためにはまず逐次刊行物としてこれを分析することが必要だということをも併せて示した。

0. はじめに

0-1. 補論の主題

この補論では、本論である「逐次刊行物とその扱いについての一考察」を補うため、主に「雑誌」というカテゴリー（資料種別）をめぐって、次の点について述べる。

- ① 雑誌の本質的な機能的特質は何か。
- ② それは何に由来するか。
- ③ 雑誌はどんな文化的機能を持つか

第一の問題設定は、雑誌をその機能的側面から見たときに何が本質的な特質かを探ろう

とするものである。ここでは、学術雑誌・一般雑誌といった特定の雑誌種別ではなく雑誌一般の特質であること、また図書などと明瞭に区別される雑誌固有の特質であることに特に注意を払う。

次に、そのような機能的特質が現れるにはそれに対応して雑誌というメディアそれ自体が何らかのいわば構造的な特質を持っていなければならない。それが何かというのが、第二の問題設定である。

第三の問題は、雑誌のそのような特質が、結果としてわれわれの社会に何をもたらしたか、逆の方向から言うと、雑誌はなぜ社会的に必要とされて今日のように発展しているのか、ということである。

0-2. 検討の目的

雑誌は今日の逐次刊行物のいわば中核にある。図書館員の中にさえ、「逐次刊行物」とは「雑誌」という概念のいわば形式主義的な拡張であって、逐次刊行物などというものを持ち出さなくても雑誌は「雑誌」で充分なのだと思っている人は少なくないように思われる。逐次刊行物について何かを論じようとするれば、そのさい雑誌についても一言断っておくのは当然の手順であろう。

確かに「雑誌」という用語は含蓄豊かな、また有用な用語である。しかし、図書館学上のカテゴリーとしてこれを見たときに、私は「雑誌」が自立的な、完結的な概念だという見解には同意できない。「雑誌」という名前と呼ばれる種々の刊行物は、「雑誌」である前にまず逐次刊行物として認識されるべきだというのが、私の考えである。

本論ではこのことを逐次刊行物の側から述べた。補論ではこれを雑誌の側から観察することになるだろう。

0-3. 検討のすすめ方

図書館学の立場で雑誌一般の機能的特質や文化的意義をまとめた文献はそう多くない。しかし最近「現代の図書館」が雑誌に関する特集を組んだのをはじめ、示唆に富む意見は幾つか出されている。その中から若干のものを抽出して検討する。その結果残された問題を踏まえて、最後に筆者の考えを述べる。

1. 雑誌の特質についての意見の検討

1-1. 速報性

1-1-1. 速報性への言及

雑誌の特質としてしばしば挙げられるのが速報性である。速報性について述べたものには、大きく分けて2つのタイプがある。

①図書と対比して雑誌には速報性があるという発言。通常この種の発言は、定性的に一言述べるに留まり、定量・例証を欠く。

②学術雑誌は、速報性を充分に実現することができないため危機に陥っているという発言。この種の発言は、多くの場合、分野名や雑誌名を特定して例示するなどきわめて具体的であり、かつその「遅れ」が定量的に示されているのが特徴である。

第一種の発言における「速報性」と第二種のそれとは、同じ「速報性」という言葉でやや異なった内容を論じていると思われる。以下これらについて順次考察しよう。

1-1-2. 第一種の速報性とその基準

第一種の発言で「速報性」の内容にまで言及したものとして、例えば次のような発言がある：「まず雑誌記事の単位でみると、内容の速報性があげられる。最新の研究成果やニュースを単行書に先んじて報じる。同じニュースが日刊の新聞など刊行頻度の高いものに最初に現れ、週刊、月刊、季刊、年刊と刊行頻度の違いによって掲載のされ方が、詳細報道、解説、要約というように変化していく。出版準備に時間が必要な図書に比べると、季刊あたりまでの逐次刊行物は準備期間も通常図書より短く、したがって新しい内容を盛り込みやすい。」*1

これがほぼ第一種の速報性の具体的なイメージと考えて良いだろう。

ここから次の2点が読み取れる。

- ① 速報性は、短い刊行サイクルでの定期刊行を前提として成り立っている。速報性の程度は刊行頻度によって規定される。
- ② ここで言う速報性とは、(著作そのものではなく、著作によって伝えるべき)情報が発生してから刊行されるまでの期間の短さのことである。

ここで言う「速報性」の基準には、メディア自体の速報性に至る以前の、著作の成立段階での時間の長短、つまり、図書・雑誌そのものというより著作の側の問題、あるいは著作と図書・雑誌との関係の問題が含まれている。具体的に言い直すならば、「図書および雑誌それぞれの持つ何らかの性質により、図書の場合は長時間かけて成立するような著作の発表手段として選ばれるのに対し、雑誌の場合は比較的短時間で成立する著作の発表手段として選択される」ということになる。そして上に引用した文章では、雑誌におけるそのような性質とは、刊行の繰り返しとそのサイクルの短さだと言っているのである。これに、著作が成立してから雑誌・図書として読者がそれを受け取るまでの時間の長短が加味されたもののトータルが、ここで言う「速報性」だと考えられる。

このような、著作の成立に要する時間の長短も含んだ意味での「速報性」を、以下では速報性* と表記する。

1-1-3. 第二種の速報性

第二種の速報性は、著作（もっぱら原報論文）が投稿されてから刊行されるまでの時間をおおよその基準としている。それは定量的に把握することが可能であり、最近の例を見ると、例えば石川*²は原子力分野の主要3誌で、論文が投稿されてからその80%が雑誌に掲載されるまでのタイムラグは11ヶ月、16ヶ月、8ヶ月だと言っている。これらの速報性は著作の成立に要する時間を考慮しない、メディア自体の伝達の速さである。以下これを単に「速報性」と言う。

このような速報性の問題は、自然科学・工学・医歯薬学系の原報誌に顕著である。そして図書との対比ではなく、その雑誌に本来求められる速報性に比べての遅れが問題とされている。速報性が失われることは、著者の側からも読者からも、その雑誌の存在意義が問われることにつながる。速報性が失われる原因は、特定誌への論文の集中と、査読に要する時間である。ランバートは査読制について詳しく述べた上で「公開される論文の質を高く維持することと、新しい研究結果をできるかぎり早く伝達するというこの間には、基本的な争いがある。」*³と言っている。

査読制と速報性との間のこのような深刻な矛盾は、雑誌にとって速報性が機能的に唯一の、あるいは単独で最優先の要求ではないことを示唆している。分野による差はあるが、一部の雑誌にとって速報性はきわめて—その雑誌の存在意義が問われるほどに—重要な機能的要件である。しかしその場合でさえ、雑誌は単に速報性を実現するものではない。そのことは、速報性が損なわれるにも関わらず 1. 特定誌に論文が集中し、2. 質の維持がはかられるという、2つの事実が示している。

1-1-4. 速報性は雑誌に固有か？

著作を社会的に実現するためのさまざまな形態の中で、速報性の実現のためには必ずしも雑誌が常に最適というわけではない。各種のインフォーマル・コミュニケーションは雑誌より早くその情報を読者に届けることができる*⁴。特定の範囲の研究者の間の情報交換が問題である限りは、これで充分目的を果たせる。なぜなら、ある情報を最も早く必要とする研究者がどこにいるかは、その分野の専門家にとってだいたい既知だからである。速報性だけなら単行書やパンフレットの方が雑誌より優れていることもある。これらは資金や実務的な条件さえ整えば、雑誌のように掲載順待ち・刊行日待ちにせずに刊行できる。つまり雑誌はインフォーマルな形態はもとより、場合によっては単行刊行物と比べても、速報性の面でより不利な条件にある。

1-1-5. 速報性*は雑誌一般の特質か？

雑誌の記事には速報性*への要求が厳しいものから希薄なものまで大きな差がある。

雑誌の記事は速報性* への要求の厳しさによっておおよそ3グループに大別される。

第一はある程度の速報性* がいわば絶対的に求められるもので、主にニュースなど時事性のある記事の類がこれに当たる。小出が指摘するように、この分野では刊行頻度—つまり速報性* の程度—がそのまま記事の性格を規定する。むしろ、速報性* の実現のために1刊行サイクル内に発生した記事はそのサイクルで必ず刊行に移されるという速報性が厳しく求められることは言うまでもない。

第二は自然科学系を中心とする原報論文などで、質的な水準の維持や、特定誌への掲載など、他の要求との関係で必ずしも第一義的とは言えないが、それでも速報性* が重要な機能として求められる分野である。

第三は速報性* への要求が比較的希薄なもので、小説誌やマンガ雑誌における小説や時事性のないマンガなどが主なものである。

1-1-6. 速報性についての結論

したがって、雑誌が著作の発表手段として選ばれる場合、それは第一義的には速報性ではなく、何か他の要件によるものだと考えるべきである。速報性は雑誌の機能として重要ではあるが、雑誌にはより本質的な特質が他にあると考えなければならない。

1-2. フロー性の強いイマ利用型メディア

1-2-1. 雑誌が「イマ利用型」だという主張

田中*⁵ は「出版物の消費・利用の場面での挙動」において、雑誌は「フロー性が強い」「短期間に消費される典型的『イマ利用型』の商品」であるとして、図書が「ストック性の強い『アト利用型』」であることと対比的に述べている。そして雑誌がこのような挙動をとるのは、雑誌が「長期的保存を前提として作られていない」「使い捨ての出版物」だからだと言っている。「長期的保存を前提としない」という点は多くの人の雑誌に対するイメージと一致する。

1-2-2. 物理的な造本・装丁

この意見について検討するにあたって、まずこの問題の形態的な側面、つまり非ハードカバー、仮綴じ等といった造本・装丁（以下単に軽装と言う）が一般的に雑誌の特質と言えるかどうかを検討したい。

確かにわれわれの感覚は「雑誌＝軽装」という図式を支持する。大部分の雑誌はハードカバーを持たない。ハードカバーで出版される雑誌の多くはAdvanceものや年刊誌（例えばNietzsche-Studienのような）であり、人によっては「定義により」これらを雑誌の範疇から排除するのを躊躇しないだろう。

だが、それでは雑誌以外の資料はどうだろうか。いわゆるペーパーバックである文庫・

新書の他、ムック、コミック、通俗実用書、マニュアル本、ガイドブックなど、膨大な種類と量の図書が「使い捨ての出版物」として軽装で出版されている。加えて、少なからぬ一般書、白書、報告書、テクニカルレポートなど、世は軽装本優勢の時代と言っても過言ではない。非雑誌側にこれほど軽装本が多くては、とてもこれを雑誌だけの特質と言うわけにはいかない。

したがって、軽装であることをただちに雑誌の特質だとすることはできない。

付け加えると、電子的媒体の刊行物では装丁による区分は全く無意味だが、それでもわれわれは図書と雑誌を区別できる。その区別が何に依るのかが問題なのであって、装丁・造本がそれでないことは明らかである。

1-2-3. 資料の利用サイクル

次に、この問題の機能的な側面、つまり資料の利用サイクルについて検討したい。短期利用を主たる目的とするということが雑誌の特質だと考えて良いだろうか。

たしかに多くの雑誌は軽装で刊行される。だが、多くの学術雑誌の場合、これはむしろ刊行と製本（表装）のプロセスの分離と捉えるべきである。これらの雑誌は刊行時には短期間のあいだ本文頁を保護するための仮の表紙を持つ。また標題紙は、各号限りの標題紙を持つか、あるいは目次頁などに標題・巻号などの表示を持つだけで標題紙を持たない。1巻（またはある適当な単位）がまとまったときに堅牢な表紙が付けられ、場合によっては巻の標題紙・目次・索引等が付される。雑誌以外では辞書の分冊刊行がこの類である。これは長期的保存を前提とした資料の刊行の一つの形であり*6、決して短期保存を前提としたものではない。学術雑誌にはしばしば号を越えて通し頁が打たれているが、これは後に合冊製本して長期保存することを前提に刊行されていることを明瞭に示している。ただしこれを製本せず「使い捨て」にすることももちろん可能である。他方、一般雑誌の多くは田中が主張するように「使い捨て」を前提に出版されているが、これを製本して長期に保存することも可能である。

以上の結論として、「使い捨て」は雑誌一般を特徴付ける特質とは言えない。また軽装の図書の多くは、文字通り「使い捨て」だからこそペーパーバックなのであり*7、「使い捨て」は雑誌に固有の特質とも言えない。

1-2-3. 合冊製本は雑誌のどんな特質に根ざしているか

むしろ着目すべきなのは、一般雑誌は合冊製本して保存することがあるが、ペーパーバックの図書は通常合冊製本をしないことである。刊行時には同じ非ハードカバーで出版されたこれらの出版物を、合冊製本されるものとされないものに分けるのは何だろうか。

雑誌の場合、その回答の鍵となるのは、雑誌が複数の独立した記事から構成されているという事実である。雑誌の場合は一論文誌では特に顕著であるように一篇一篇の記事は相互に、また雑誌に対して、独立性が強い。またそれを反映して書誌的にも雑誌の標題と個々の記事の標題は最初から分離している。このため、合冊されることによって雑誌と記事との関係が影響を受ける度合いがごく小さい。これに対してモノグラフィックな性格の強い出版物は、記事の標題がそのまま刊行物の標題になる（両者が分離していない）ため合冊になじまず最初からハードカバーで出版されたり、あるいは軽装でも合冊製本されないことを想定した形で出版されるような場合がある（例えば Marbacher Magazin）。

1-2-4. 経済性？

以上で検討したことに関わって、田中は雑誌が「経済コストを最小限に押さえたメディア」であり、これが雑誌の最も主要な特質だと主張している。田中によれば、雑誌が低コストなのは「長期的保存を前提としない」ためであり、この結果「刊行に要するハードルが低」くなり、少数意見を含む多様な意見の公表のためのメディアとなり得たという。

しかし、雑誌が図書より際立って低コストだという主張にはいささか無理がある。

多くの商業雑誌や、通信などは、たしかに見かけ上、単価が安い。また、学術雑誌でも安いものがある。しかし、この見かけ上の安さは、図書と比較できる本来の意味でのコストとは別の要因によるところが大きい。その多くは、▽広告収入で出版費用の一部をまかなう*8、▽ボランティアで編集をする、▽公的なファンドから補助を受ける、▽学会や研究会の会費から発行費用を負担する*9、▽著者にページ・チャージを負担させる、などの方法によって結果的に安価に頒布することを可能にしているものである。これは単に、実際のコストが価格に反映していないだけであって、低コストと言うべきものではない。むしろこのようなさまざまな努力は、雑誌の発行が決して経済的にも楽ではないことを物語っている。商業誌の場合、出版者は継続刊行を維持するために多数の編集・営業スタッフを雇っている。また、読者の獲得のために過大な部数を流通ルートに常時乗せなければならない。十分な読者を獲得できない場合、継続的刊行は経営を硬直化させ、出版者は大きな資金的負担を負うことになる。

本論でも「単行刊行が刊行の最も基本的な形態」だと述べた通り、1点限りの単行刊行の方が2号も3号も継続刊行するより「ハードルが低い」のは自明の理である。刊行を継続するほうが困難なのである。

むしろ、なぜこのように困難な条件を乗り越えてまで単行刊行ではなく雑誌として継

続刊行する必要があるのかが問題である。商業誌の場合は、もしも軌道に乗れば資本の計画的な回転と経営的な安定が期待できる。しかしこれは非商業誌にはあてはまらない。雑誌一般に通用する答が必要である。

1-3. 複数の記事が1つの号に含まれる

1-3-1. 複数の記事の掲載についての指摘

上田・倉田^{*10}は複数の記事が掲載されていることを雑誌の重要な特色としている。そして複数の記事が編集者と読者の暗黙の了解による一定の方向性を持つことによる安定、および、一定の方向性に沿った複数の記事の中からの選択可能性が、雑誌を継続的読者に結び付けているという。また、複数の記事と雑誌との関係については、市販されている雑誌の大部分では編集者が主導的に著作と記事内容を決定しているが、学術雑誌では編集者の関与する範囲は小さく、雑誌は個々の学術論文を収容する搬送体(package)としての性格が強いと言っている。

小出^{*11}は、雑誌（小出は「逐次刊行物」としているがこの部分は実際には雑誌を中心に論じている）というメディアに固有な3つの特性のうち2つとして「内容の限定性、専門性」と「内容の部分性」を挙げ、雑誌では個々の論文・記事が専門化され限定された情報を扱うとともに、「編集者は読者層をおおよそ想定して雑誌を構成し、特定分野における専門性によって雑誌の特色を打ち出すことが多い」、また、「複数の記事によって全体が構成されるので、一つの記事については総合性は要求されない」と説明している。

複数の記事の掲載を雑誌の主要な特質の一つだとする上田・倉田の見解に対し、筆者も基本的に同意見である。また、小出の指摘もこの点に関わって、おおよそとしては現場での生きた姿を通じて雑誌の特性を的確に捉えている。以下、細部を少し整理しながらこれらについて検討したい。

1-3-2. 「搬送体」概念について

上田・倉田が、学術雑誌が「搬送体」であると言うとき、それは主として雑誌と掲載される個々の論文との関係について、前者が後者を内容的に主導しないということを指していると思われる。しかし、それを言うならば、図書とその内容である著作とも、おおよそこれと同様の関係にある。また学術雑誌の中にも依頼記事があり、他方、新聞や一般雑誌にも投書欄のように記事から見て雑誌が「搬送体」であるというべき部分が含まれている。したがって、「搬送体」という概念は、雑誌一般の特質を表すものではなく、また学術雑誌の特質を表すものでもなく、刊行物一般に観察される一現象が学術雑誌においても見出されたと言うべきだろう。

1-3-3. 刊行意図としての「方向性」

上田・倉田は、雑誌における「一定の方向性」の強弱を認め、方向性が強いもの＝「編集者の意図によって、著作と記事内容が決定される」とし、商業雑誌がそれに当てはまるとした。これに対して学術雑誌では編集者の関与が小さいとしたが、これは方向性が「弱い」ものに当たるようである。

しかし、上田・倉田が言うように、「一定の方向性」が雑誌を内容的に安定させて継続的読者を獲得するための要因となるものであれば、これは個々の号の内容的な統合性よりも、個々の号の編集行為を越えてその雑誌の一般的な刊行意図の一部をなすものと考えるべきだろう。その核心部分は必ずしも「暗黙の了解」ではなく、一般雑誌では時に「創刊の辞」という形で宣言され、学術雑誌ではさらに明確に、Aims and scopeや投稿規定という形で常に明示されている。もちろん、特に一般雑誌の場合、読者はその雑誌の過去の号から経験的に「方向性」を知るのであって、実際には「暗黙の了解」に近い。また学術雑誌の場合でも、もっと微妙なカラーなどについてはやはり同様である。

雑誌と記事の関係から見た学術雑誌と一般雑誌の違いについての上田・倉田の指摘は重要だが、「方向性」は刊行意図の一環として捉えられるべきであって、各号の具体的な編集のあり方と混同されるべきではない。方向性は、雑誌が逐次刊行物であるという事実と深く関わるものなのである。

小出は同じ問題を、「内容の限定性・専門性」と結び付けて捉えているが、ここでは個々の記事の専門性・限定性（これは次に小出が挙げている「部分性」と同じ）と、編集者によって構成された1号または1タイトルの雑誌の専門性・限定性とが混同されている。後者について言えば、雑誌1号または1タイトルより図書1点の方がその内容は明らかに限定的である。編集者が「読者層をおおよそ想定して」雑誌の特色を打ち出すという叙述が的確に示す通り、小出がここで言いたかったのは「方向性」ではないかと思われる。

1-3-4. 統合性としての「方向性」

では、個々の号と記事との関係で見た場合の「一定の方向性」とは何だろうか。それは1号の中における各記事の独立性と統合性である。編集者の関与の強弱は各記事の独立性と統合性に関わる問題であり、そこには上田・倉田が指摘する通り、雑誌の作られ方の違いがある。学術雑誌では個々の記事は互いにきわめて独立性が強く、号全体として見れば（編集方針の反映による主題面あるいは形式面での「方向性」を別にすれば）統合性は弱い。上田・倉田が比喩的に「搬送体」と呼んだ通りである。これに対して、

一般雑誌では編集行為の関与によって号全体の統合性が比較的強い。記事相互の独立性はなお強いが、編集行為との関係を通じて独立性は弱められている。ただし学術雑誌と一般雑誌とを問わず、「特集」形式をとるときは、統合性は比較的強くなる。しかしこのような強弱の比較は雑誌の枠の中限りのものであり、1点の図書の各部分に比べれば統合性は格段に弱い。倉田らが前著で雑誌一般を「搬送体」と呼んだのはこれを念頭に置いたのだろう*11。

ここでの眼目は、雑誌は互いに独立性の強い複数の記事から構成されており、書誌的な単一性にもかかわらず全体として比較的弱い統合性しか持ち得ないということである。

1-3-5. 記事の部分性

雑誌の記事の内容が部分的・断片的になるというのは、傾向的にそうなるというこであって、必ずしも雑誌の特性として言えることではない。雑誌の記事にも総合的な記事はあり得る。また、図書にも専門的・限定的・断片的・部分的な内容だけに終始したものが少なからずある。ただ両者は掲載できる分量に違いがあるため、図書では総合的な内容にしやすいし、雑誌はむしろ限定的・部分的な内容を中心にした方が効果的に媒体を使える。分量的な違いは、雑誌が互いに独立の複数の記事を掲載するということから来ている。ここでも重要なのは、独立な複数の記事が掲載されるという雑誌の構造的な特性である。

1-4. 継続性をめぐる機能的観察

雑誌を定期刊行物だとする意見*12には、不定期刊行の雑誌が現に多数ある以上、同意できないが、少なくとも雑誌が逐次性を持つ刊行物だということについては異論の余地がない。問題はそれが機能的にどのような意味を持つかということである。

小出*1は、「時系列に従って刊行されるので、時系列を追って変化する動向を捉えることができる。」、および（形態の同一性によって）「どのような種類の情報がどの雑誌に載るか、予測が付きやすい」ことを挙げている。また、上田・倉田*10は、「編集者と対象読者はほぼ同一である」ことを雑誌の特色に挙げ、「雑誌では次の号の記事の内容は明らかでないことが多いにもかかわらず継続購読されている。これは、今後刊行される号は既刊の号と同じ範囲、あるいは方針で編集されることが期待されているからであ」って、「雑誌は編集者と読者の共通の関心によって継続性が保証されている」と言っている。

1-5. 小 括

以上、雑誌の「特質」とされるものについて幾つか検討してきた。フロー性（「使い捨て」）および経済性は否定され、速報性は雑誌一般の特質ではないという結論になっ

た。残ったのは、複数の記事が1つの号に含まれるということ、そこに「方向性」つまり刊行意図の介在が認められること、および継続性である。継続性の機能的な意義についてはまだ検討を残している。

また、幾つかの問題がこの中で新たに提出され、未回答のまま残されている。それは以下のような問題である：速報性を要求されない記事も含めて、記事が雑誌という媒体を選ぶのは速報性以前に雑誌のどんな特質によってか？；雑誌の継続的刊行は経済的にはむしろ困難と思われるが、それでもなお雑誌が刊行されるのは一般的になぜか？；継続性の機能的意義をどう捉えるか？。

これらに答えるためには、雑誌の特質に関するここまでのさまざまな見解の中で比較的意識が薄かったと思われる問題に着目する必要がある。それは著者・著作の側から見た読者の確保という問題である。読者の側からの求める情報へのアクセスと、著者から見た読者の確保は裏表の問題だが、これらを併せて見ることによってはじめて媒体を立体的に見ることができるのではないかと考える。

次章で雑誌の文化的意義について提出されている見解を検討したのち、終章で再びこの問題に戻りたい。

2. 雑誌の文化的意義に関する主張の検討

2-1. 雑誌の意義を多様性に見出す意見

図書館学の分野で雑誌というメディアの文化的・社会的な意義にまで踏み込んで論じたものは少ない。その中で、田中は図書館における雑誌の収集保存を促進しようとする立場から、雑誌の文化的意義と、それを図書館が収集する意義について論じた^{*5}。田中によれば雑誌の記事は、「雑誌という形態でなければ刊行され公知とならなかったであろう情報が大半を占め」、このため「少数者の意見公表の場が確保されるなど多様な情報が提供されてきた点に雑誌のメディアとしての重要性がある」という。そして「速報性よりむしろその多様性、裾野の広さ」こそ雑誌のメディアとしての意義なのだと言っている。

2-2. 検 討

一般雑誌の収集・保存に図書館が積極的に取り組むことを訴えた田中の主張は筆者としても共感をもって受け止めることができる。だが田中がその理由として挙げた「多様性」は、果たして雑誌に際立って特徴的な特質だと言えるだろうか。

私見では「少数者の意見公表」や「多様な情報の提供」のかなり多くの部分は「図書、パンフレットおよび一枚もの」(AACR2の用語による)等の形で実現されてきた。新聞・雑誌も多くの部分を担ってきたのは事実であり、多様な情報の提供に果たす雑誌の役

割をいささかも否定するものではない。しかし雑誌だけが抜きん出て貢献したともまた言い難いのではないか。「裾野の広がり」についても同じである。一例を挙げれば、最近の「自分史」出版の「裾野の広がり」は主に図書を媒体とするものであって、今のところ雑誌の貢献度は小さい。田中は雑誌は低コストで「刊行に要するハードルが低い」から裾野が広がり多様な情報が提供できると主張するが、むしろそれはパンフレットや1枚物の膨大な「裾野の広がり」にこそ当てはまる。

3. 雑誌の機能的特質と社会的意義 ーまとめと私見ー

以上、はじめに提示した問題についての幾つかの見解を紹介し、検討してきた。ここまでの検討結果をふまえながら、これらの問題についての考えを提示したい。

3-1. 雑誌の機能的特質

私は、雑誌の本質的な機能的特質は、情報を組織化して、情報の継続的な流通経路（チャンネル）として機能するところにあると考える。以下、これについて順次説明する。

3-1-1. 情報の組織化

雑誌という形による情報の組織化は、3つの不可欠な要素から成っている。

- ① 刊行意図
- ② 刊行意図の下での逐次的刊行
- ③ 刊行意図の下で、独立の複数の記事が1つの雑誌に編集されること。

雑誌には、独立性の強い複数の記事が掲載されているが、それは、一般雑誌に見られるように雑誌（編集者）の側に主導性がある場合であれ、あるいは学術雑誌（特に原報誌）に顕著のように著作（著者）の側の主体性が強いものであれ、単に複数のものが集まっているのではなく、一定の刊行意図（またはその具体化としての編集方針、査読体制など）によって、主題・傾向・質的水準・分量・形式などをコントロールされている。したがって、個々の記事は独立性を持つとともに、継続刊行される1つの雑誌全体として見れば、それらの主題・傾向・質的水準・分量・形式などはおおよそある方針に沿って組織されたものとなる。上田・倉田が「方向性」と呼んだものにほぼ相当する。読者の側から見ると1つ1つの雑誌は、複数の情報が実体的な一つのまとまり（クラスタ）を形成している。また、それが単発的に現れるのではなく、刊行意図のもとに逐次刊行される。

3-1-2. 読者から見たクラスタ化と逐次刊行

雑誌という形で情報がクラスタ化されたことにより、読者は必要な情報に合理的にアクセスすることが可能になる。もしも新しい著作が次々と単行刊行物として現れるならば、読者はその一つ一つについて、それが自分の要求に合うものかどうか吟味して選択しなけ

ればならない。これに対して、雑誌が情報をクラスタ化していることにより、読者は個々の情報を直接に選択するのではなく、まず求める主題・品質のクラスタを選択し、次の中で個々の著作にアクセスして必要な情報を得るという方法をとることが可能になる。例えば、映画について情報を求める人は「キネマ旬報」を覗き、また、労働法学の動向を把握したい人は「労働判例」や「労働法学研究会法」に目を通すという風に。

そのような情報のクラスタは、時系列的にも組織化されており、読者の側でもこれに対して時系列的に（定期購読する、毎号図書館に見に行く、毎月本屋を覗く）、ないし系統的に（巻号を手掛かりに特定の記事を拾い出す、総索引から辿る）対応ができる。以上が読者から見た情報流通の組織化である。

3-1-3. 情報の継続的な流通経路

クラスタ化され、逐次刊行されることによって、情報は継続的な流通経路を得ることになる。この流通経路は、1タイトルの雑誌という書誌的な単位を持ち、クラスタ化によってある質を持ち、逐次刊行によって時間的継続性を、また更に定期刊行の場合は刊行サイクルという時間的特性を持つ。

読者は、定期購読や寄贈依頼という方法でこの流通経路を開設することができる。このような固定読者が存在し得ることは、図書にはない雑誌の特質である。店頭販売の商業誌の場合流通経路は開放的であり、読者は号ごとに選択してこの流通経路にアクセスする。この場合は固定読者の代わりに、時間的に変動する読者の層が存在することになる。

雑誌という形で流通経路が成立すると、著者の側から見ても、読者の側で起こったのと似た現象が起こる。単行出版であれば、著作を個々に出版し、個々に読者を求めなければならないが、流通経路が開設されていれば、主題・傾向・求められる品質水準や形式・刊行時期などの点でその著作に適合した経路を選択し、そこに著作を委ねることによって確実に著作のある範囲の読者に届けることができる。多くの学術雑誌や紀要・同人誌などが経営的な困難にも関わらず発行されるのは、これが主な理由である。雑誌の側から見ると、雑誌は時を逐って次々と発生する情報の受け皿として機能していることになる。

3-1-4. 速報性

速報性という特質も、ここから派生する。単に早く知らせるだけなら、手紙やパンフレットの形で直接配ってしまう方が早いことは先に見た通りである。これに対し雑誌の速報性は、一般読者に対して安定的に組織的に速報されるところにその特質がある。手紙やチラシによる速報性から脱却し、情報を組織化して知らせるという方向にすすむことによって、雑誌や新聞は成立し、発展してきた。

図書と対比してみよう。図書の場合は著作1件1件を読者が選択しなければならないの

で、必要とする読者がその著作を発見するまでのタイムラグが無視できない。これに対し雑誌では、固定的であれ開放的であれ流通経路は既に開設されているので、その著作を必要とする読者の多くにとってタイムラグはごく小さくなることが期待される。定期刊行の場合には、読者は「どの経路（雑誌）を」選択するかに加えて、「いつ」捜せば良いかも予めわかっているので、タイムラグはさらに確実に短縮される。このような出版から読者までの距離の短さが、すなわち雑誌の速報性（そして速報性*）の基礎である。

3-2. 雑誌の機能的特質の根拠

以上に述べたように、雑誌が図書と異なる媒体としての独自の地位を占めて来たのは、情報の流通経路としてのその特質に多くを負っていると思われる。そしてこれは、図書との次のような違いに根拠を持っている。

① 刊行のされ方の違い。

② 刊行物と（その中に含まれる）著作との関係、つまり刊行物の内部構造の違い。

したがって、雑誌の特質を捉えるには、その刊行形態と内部構造の分析に進まなければならないというのが筆者の考えである。

その基本点は既に本論で詳述した。要約すれば、このような特質を持つのは、第一に雑誌が逐次刊行物だからであり、第二にその中でも時系列的に発生する著作に対する受け皿刊行物だからであり、第三にその中でも1つの号に複数の独立した著作を含むというタイプのものだからである。

3-3. 雑誌の文化的意義

雑誌の文化的な意義は、情報（ここでは印刷形態をとる著作を言う。以下同じ）の流通を組織化して、大量かつ広いレベルにわたる情報流通の可能性を拓いた点にある。以下これを説明する。雑誌という流通経路の開設により、社会的には何が起こったろうか。

第一に、情報が組織化されたことの当然の帰結として、単行刊行だけでは到底不可能だった大量の、かつ（田中論文の主張の通り）多様な情報が流通できるようになった。

第二に、読者にとっても著者にとっても、個々の情報（著作）を選択し、あるいはやりとりする前の段階での経路選択が可能になったため、読者・著者双方による経路選択の結果として、ある読者・著者の集団に固有のいわばローカルな情報経路が成立するようになった。最も狭い形から最も緩やかな形まで、3つのタイプがある。

まず、会報・通信・機関誌・地域誌など、特定の組織・集団の範囲内での情報流通。

次に、ある限定された関心をめぐる著者のグループと、それに対するより一般的な広がりを持つ読者層との組み合わせ。同人誌、大学紀要、私的な研究グループの研究発表手段としての研究誌など。

最後に、ある限定された主題範囲について関心のある広範な著者と読者の間の定常的な情報流通。サブカルチャーを支える情報流通媒体としての雑誌の一面である。

単行刊行物と対比して重要なのは、これらが単発的な情報のやりとりでなく、やりとりの経路として機能している点である。

第三に、組織化された情報流通経路が開設されることによって、(学術雑誌のように著者が主導的か、あるいは商業雑誌のように出版者が主導的かはともかくとして)さらに多くの著作の発生を促した。

注.

- * 1. 小出いづみ 情報アクセスと逐次刊行物: 専門図書館の視点. 現代の図書館, 31(4):237-246, 1993
… ここで挙げられている特性の項目は「学術雑誌: その管理と利用」(日本図書館協会, 1976)とほぼ同じ。
- * 2. 石川正, 原子力分野における雑誌論文投稿とタイムラグ. 情報の科学と技術, 44(5):266-269, 1994
- * 3. ランバート, ジル著 日本図書館協会情報管理委員会訳 電子時代の学術雑誌, 日本図書館協会, 1989 :38
- * 4. 曾根由紀子 資料論: 資料の発生、流通、利用. 情報の科学と技術, 43(4):309-319, 1993
- * 5. 田中久徳 雑誌資料の課題と展望: 図書中心主義との訣別. 現代の図書館, 31(4):215-218, 1993
- * 6. 刊本の歴史において、刊行と製本のプロセスの分離は決して雑誌にだけ特殊に見られる現象ではない。今世紀に至るまで、刷紙(折粘)・紙装の状態の図書を販売時に(販売者が)または購入後に(読者が)製本師に製本させるというのは珍しいことではなかった。また完結後の合冊製本保存を前提とした分冊刊行という形態は、図書にも現れた。
▽高野彰 形態から見た本の歴史. 日本図書館学会研究委員会編 図書館資料の保存とその対策. (論集図書館学研究の歩み. 第5集). 日外アソシエーツ, 1985 :28-44
▽寿岳文章 図説本の歴史. 日本エディタースクール出版部, 1992 :162-164
▽荒俣宏 図鑑の博物誌. 増補版. (集英社文庫). 集英社, 1994 :100-103
- * 7. 今日の主要な造本形態の一つである無線綴じはむしろ短期保存を前提にしている。
- * 8. 藤竹暁・川本明編 図説日本のマス・コミュニケーション. 第3版. (NHKブックス. 690). 日本放送出版協会, 1994 :170
- * 9. 箕輪成男 情報としての出版. 弓立社, 1982 :167-170
- * 10. 上田修一・倉田敬子 情報の発生と伝達, (津田良成編, 図書館・情報学シリーズ, 1) 勁草書房, 1992 :130-131
- * 11. 津田良成編 図書館・情報学概論. 第2版. 勁草書房, 1990 :92
- * 12. このような見解の最近の例としては: 森岡倫子 さまざまな属性から見た学術雑誌の定義. Library and information science, 31:51-73, 1993